

性的マイノリティの生活困難調査の困難

志田哲之 (早稲田大学)

「性的マイノリティ」という対象は、性的マジョリティにとって漫画『ドラえもん』のポケットのようなものであるのかもしれない。

たとえば10年近く前には「LGBT市場」が日本国内でも話題となった。これはグローバル化が推し進められる社会において、すでに市場の開拓はされ尽くしたも同然であり、苦肉の策としてSOGIを軸として創出された市場だったといえる。

家族研究においても同様の指摘が可能ではないかと報告者は考えている。家族研究と性的マイノリティの関係は、経済・経営領域から性的マイノリティへの注目が行われた時期よりもだいぶ先行しているといえる。家族病理学の研究者は1980年代末まで同性愛を家族病理の類型の一つとして数え上げていた。また1980年代後半に登場した近代家族論は、「登場した当初から近代家族の先にある『ポスト近代家族』について回答することを運命づけられていた」が、この回答の模索の中で性的マイノリティが形成する関係が言及され、「新しい家族」という枠組みを設定した上で、その枠組みの中に取り組みでいこうとする営みが見られるようになったのである(池岡, 2017)。とはいえ、いうまでもなく上記の営みは、1980年代にレズビアン/ゲイの中でもカップル志向が高い者たちから要求された婚姻制度の適用や子どもを迎えることと親和性が高かったからこそ見られたものだともいえる。

そして1990年前後以降の日本の家族研究において性的マイノリティは、ポスト近代家族の模索の手がかりとして海外の当事者の動向を紹介が何度となく行われる傍ら、日本国内では当事者のカップル関係や親子関係への調査研究の成果が主立ったものとなるに留まってしまっているともいえる(たとえば神谷, 2017、三部, 2014 など)。

しかしながら、長引く経済不況とこれによる雇用の不安定さや所得の低下が生涯未婚率の上昇に大きな影響を及ぼしている状況において、性的マイノリティの中にもカップル形成や子どもの養育ができるだけの力を持ってない人々が多くいると当然考えられる。性的マジョリティとしての異性愛者は、生涯未婚率の上昇と少子化の関連付けにより、さまざまな支援が実施されつつあるが、性的マイノリティはこの支援を受ける側として想定されていない。結婚規範の強い日本において、晩婚化・未婚化の解消に向けた動きは、未婚の子を持つ親たちによっても支持されるであろうが、定位家族に自らのSOGIを打ち明けることにしばしば高いハードルを覚える性的少数者にとって、親からの支援や支持をとりつけるまでには、複数の高いハードルを越えなくてはならないと認識されていると考えられる。またそれどころかSOGIを打ち明けることによって生じる親との不和や、打ち明けないことによって生じる親との疎遠は、人生の困難に直面した際にこれを克服する資源の欠如にも繋がる。

そして生活困難を抱える性的マイノリティは、研究にあたってその所在をつかむことさえも困難である。国内での大規模な性的マイノリティ当事者向けの量的調査からのスクリーニングは現時点では難しい。また日々の生活に追われる生活困難者は交友関係の構築や維持も難しい状況にあり、当事者の中でも不可視化されやすいと考えられる。よってスノーボールサンプリングを試みてもなかなか対象者として浮かび上がってこない。

報告にあたっては、このような調査研究の実施にあたっての困難も示しつつ、報告者による性的マイノリティの生活困難調査からの知見と、調査研究自体の困難について論じたい。

[文献]

池岡義孝, 2017, 「戦後家族社会学の展開とその現代的位相」 藤崎宏子, 池岡義孝編著『現代日本の家族社会学を問う』ミネルヴァ書房

神谷悠介, 2017, 『ゲイカップルのワークライフバランス -同性愛者のパートナー関係・親密性・生活』新曜社

三部倫子, 2014, 『カムアウトする親子 -同性愛と家族の社会学』御茶の水書房

(キーワード: 性的マイノリティ、質的研究、生活困難)